ニーチェにおける存在論的真理と倫理

松本　祐史

序

この論考はニーチェの考える存在論的真理とニーチェ自身のポジティヴな意味での倫理説との連関を大まかな見取り図として描き出すことを意図して書かれた。既成の倫理・道徳に対するニーチェの論難は『道徳の系譜』所収の三論文等に詳しい。だが、そこに表されている系譜学的・深層心理学的考察は既存の倫理・道徳の批判を第一の標的としているが故に、ニーチェ自身のポジティヴな倫理説が展開されている箇所は存外に少ない。例えば、有名なルサンチマン説にしても、まずもってキリスト教道徳に対する駁論であり、それ自身がニーチェの積極的な倫理説という訳ではない。ニーチェの内にあるポジティヴな倫理説の構案は、主として遺稿によりながら再構成を図り、そこから推し量るしかない。ニーチェ自身のポジティヴな倫理説はニーチェ自身の存在論的真理を基礎に展開されていると考えられる。そこで筆者は以下、ニーチェにおいて存在論的真理はいかなるものであったのかを絶えず念頭におきながら、そこに由来する倫理説の大綱を剔抉してゆきたい。

論述の構成は以下のとおりである。ニーチェにおける存在論的真理とは、永劫回帰体験によって与えられたものという部分が大きい。よってまず、永劫回帰体験がニーチェにとってもった意味を確認する（Ⅰ）。更に、それを基礎に、「永劫回帰」（後の用語を先取りしていうと、寧ろ「永遠反復」）する世界の中で尚、意味ある生が可能であるかという問いに応じる際に枢要をなす、ニーチェの考える主体概念の検討がなされる（Ⅱ）。最後に、その両者に示された存在論的真理をもとに、ニーチェの考える倫理の中心となる概念の解明がなされる（Ⅲ）。

尚、以下の論述における用語法について一言しておきたい。筆者は「存在論的」という用語を、存在者の全体が全体としていかに（wie）あるかという点、並びに存在者がその本質として何で(was)あるかという点のいずれかに関わる用語として使用する。特に後者、存在者の本質に関わる事柄に関しては、特に「形而上学的」という用語を用いる。

I

ニーチェの哲学的思惟において、存在論的真理と倫理はいかなる関係にあるのであろうか。その点を考察してゆくにあたって、まず永劫回帰体験[1]がニーチェに与えたものは何であったのかを解明することから始めたい。以下、永劫回帰体験がニーチェに教えたもの・その帰結の順に論じる。

永劫回帰体験がニーチェに教えたのは、まず第一に、我々の生きうる場所はこの世界しかないということであった。永劫回帰体験とは言わば、世界の形而上学的原理への没入であり、それは同時に世界は総体としてどのようなものであるか、ということをニーチェに教えた体験である。世界はどういうものとしてニーチェに立ち現れたのであろうか。それは、自分の生きられる場所は、常にこの世界・此岸にしかなく、それ以外の場所に自分の生の場所を求めることはできないということである。よって別の世界・彼岸というようなものは存在しない。しかも我々は此岸のこの生のみを反復して体験するのであって、此岸の内の別の生を我々が生きることもない。我々の生の、現在のこの世界・この生への限定と反復、それが第一の教えであった。

永劫回帰体験がニーチェに教えたものは、第二に、世界には神は存在しないということであった。ニーチェは永劫回帰体験によって、神を見いだしはしなかった。寧ろ、端的な神の不在を体験した。世界には神が存在していたのではなく、世界自身が巨大な生成としてあった。世界は生成として、存在していたのである。「生成」[2]という仕方で世界を捉えるのは、ニーチェの世界観の基本となるものであって、生成とはこの世界の形而上学的原理にあたる。生成はこの現実世界を離れて存在するものでもないし、現実世界が生成から離れて存在するものでもない。現実世界と生成としての世界はぴったり重なりあうかたちで存在している[3]。

以上の2点から、どういう帰結がもたらされるであろうか。上に述べた第一の点から、導きだせるのは、この世ではない別の世を我々が生きられると説くあらゆる思想は虚偽であるということである。その虚偽性は永劫回帰体験を経たニーチェにとっては証明の要のないもの・端的な明証性を持った事実であった。彼岸の存在等は端的に虚偽であるが故に、それを虚偽と認識してしまった者にとっては、その者の人生を導く力をもっていない。ある思想がある人の人生を導く為には、その人にとってその思想が、程度の差はあれ、とにかく信じられていなければならない。思想が信じられるためには、その思

想が当人にとっては、虚偽でなく事実として存在しているか、少なくとも事実の可能性があるものとして見做されていなければならない。つまり、彼岸を説く思想を信じ、その思想によって人生を統御しうるには、その思想が当人にとって、事実として存在するか、少なくとも事実の可能性があるものとして見做されているのでなければならないのだ。しかるに、永劫回帰体験を経たニーチェにとっては、そういう思想を信じられる条件は無かった。何故なら、〈我々の生きられる場所は、今、ここのこの生、この世界にしかない〉ということを知ってしまっているのであるから。従って、ニーチェ自身にとっては、彼岸を説く教説はあきらかな虚偽であり、無意味なものとみなされることになった[4]。

第二の点、神は存在しないという認識はいかなる帰結をニーチェにもたらしたのであろうか。神は存在しないのだとすれば、一体生の意味を我々はどこに求めたらよいのか。世界自身に目標はなく、我々はその中で、反復される同じ生を生きてゆくことになる。こういう我々の生の不可避的なありかたの中で、尚、意味ある生は可能であろうか。ここから、ニーチェの思惟は意味を生み出す根拠の探求にむけられる。そして、実は永劫回帰体験の内に、意味とはいかなるものであるのかという問いに応じる示唆が与えられていたのである。永劫回帰体験は、我々の生に起こる出来事の反復を教えるが、同時に我々の生におこる出来事の意味の反復を教えるわけではない。起こる出来事の反復は説くが、起こる出来事をどうとらえるか、いかなる価値としてうけとめるかは、未決定なのだ。単なる出来事の反復とそれをいかなる事柄として受容するかは独立である。このことは、ニーチェのテクストの中でも用語上一定の使い分けがなされていることによっても知られる。単なる出来事の反復をいう時には「永遠反復」(ewige Wiederkehr[5])という用語を用い、その事態をどううけとめるかということ迄含んでいる場合は「永劫回帰」(ewige Wiederkunft)という用語を用い、区別している。永劫回帰体験は、「永遠反復」(ewige Wiederkehr)を不可避のものとするが、「永劫回帰」(ewige Wiederkunft)を確定する訳ではないのだ。

我々に起こる出来事が確定していようと、それを我々自身がどのようにうけとめるか迄は確定していないし、確定されもしない。つまり、出来事の意味は我々の外部に属する事象によって決定されるのではなく、我々がどうそれを受け止め、受容するかにかかっているのである。それ故、ニーチェにおいて出来事の意味を決定する主体がいかなるものとして構想されているのかを見ることが、「永遠反復」する世界の中で尚意味ある生

は可能であるか、という問いに答える前提をなす。よって、ニーチェにおいて主体はいかなるものとして考えられているのかを次に考察しなければならない。

II

ニーチェの主体思想を理解するにあたり重要なことは、意識的自我は第一次的なものとは考えられていないということである。この事をまず確認しておきたい。この事実は用語の上にもはっきり表れていて、ニーチェは自我（Ich）と自己（Selbst）を対比的に用いている。ニーチェにとって権力意志としての主体に対応するものは、自己であって自我ではない。

「君は〈自我〉(Ich)を語り、この言葉を誇りにしている。しかし、より偉大なものは、君が信じようとしないものにある。つまり、君の肉体（Leib)とその肉体のもつ大いなる理性にあるのだ。それは、自我を語りはしない。自我を行うのである。・・・（中略）・・・感覚と精神（筆者註　感覚・精神は自我に属するものである）は、道具であり玩具であり、それらの背後にはなお自己（Selbst）が存在している。」（Z　Von den Verächtern des Leibes ）

『ツァラトゥストラ』の中で自己（Selbst）として指示されたものこそが、後年、権力意志として規定し直される我々の形而上学的主体である。遺稿の中では、例えば次のように言われる。

「「一体、解釈するのは誰か？」と問うてはならない。そうではなく、解釈するはたらき自身が、権力意志の一形式として、現存在を、ひとつの欲動としてもっているのである。（しかし、「存在」としてではなく、〈過程〉として、〈生成〉として）」(KSA, Bd.12, 2[151]＝WM 556)

ここで現存在といわれているものは意識的自我と考えられる。現存在という、意識的自我は、解釈するはたらきの結果として成立しているのである。すなわち、意識的自我は第一次的なものとは考えられていない。第一次的に存在するのは「解釈するはたらき自身」である。また別の箇所で、「権力意志は解釈する」(KSA, Bd.12, 2[148]＝WM 643)

と規定されていることを考慮に入れると、ニーチェ自身が、「「一体、解釈するのは誰か？」と問うてはならない」と言明しているにもかかわらず、この解釈の主体はなお考えることができ、それは即ち権力意志としての主体であると考えられる。つまり、権力意志としての主体の解釈するはたらきによって、この意識的自我が定立されるのである。従って、ニーチェにおいて重要になるのは、意識的自我を成立させている形而上学的根拠の方にあることになる。肝要なのは、権力意志としての主体の方である。

それでは、権力意志としての主体はどういうありかたをしていると考えられるのであろうか。権力意志としての主体は、ニーチェのいう「生成」という用語で規定されるような存在様式をもつ。従って、主体は所謂「もの」として自己同一的・持続的・静止的なありかたをしているのではなく、自己同一的でなく、流動的で、力動的なありかたをしているのである。それは、つまり、他の諸々の権力意志との関係の内ではじめて成立するようなありかたであり、一人の人間の権力意志を他の権力意志から分離・独立させて実体化して考えることは原理的にできない。

一つの権力意志はそれ以外の権力意志との関係の内で初めて権力意志たりうるのであり、ニーチェの形而上学的原理は本質的に関係概念である。このことは多くの論者によって繰り返し説かれてきたし、筆者はそれに対して根本的な疑義をさしはさもうとするものではない。ただ、従来の解釈において、過度に権力意志の生成的性格が強調されるあまり、一つの権力意志の「一つの」と言われうるような側面、つまり、自己同一的でなく、流動的でありながらも、尚、「一つの」権力意志というかたちで、尚区別・区分がなされるような視点が、ややもすると一様に軽視されてきたことを遺憾とするものである。一つの権力意志が自己同一的でないとは、厳密な意味では自己同一的でないという意味で、自己同一性の全き欠如を意味する訳ではない。寧ろ、厳密な意味で自己同一性がないにもかかわらず、それでも尚、ある種の自己同一性を語りうるような視座を確保しておくことが、ニーチェの権力意志説を理解する為に、とりわけその倫理的側面を理解する為には、肝要であるように思われる。

この点について説明を加えよう。ニーチェは権力意志の権力の増大ないし減少について語るが、権力の増大・減少を語りうるためには、権力意志自体がある限定されたものと考えられていなければならない。一つの権力意志という言葉を有意味に語り得る為には、他の権力意志と区分される一定の区画が設定可能でなければならない。つまり、生成の世界がいかに自己同一性を欠くものであろうと、ある視座によっては、自己同一的

と見做しうる姿を、個々の権力意志が取りうるものとして、設定されているのでなければならない。

この文脈においてはニーチェの主体領域の議論が重要であろう。以下引用文をもとに考察を進めたい。

「主体（Subjekt）という〈アトム〉は無い。主体領域（Sphäre eines Subjekts）は絶えず増大しつつあるか、減少しつつあるかである。主体という系の中心は絶えず変動しつつある。獲得した量（die angeeignete Masse）を有機化できない場合、主体は二つに分裂する。他方において、主体は自分より弱い主体を無化することなしに(ohne es zu vernichten)、自分の機能に改造し、ついにある程度までそれと合体して、一つの新しい統一を形成することができる。主体は〈実体〉ではなく、寧ろそれ自体、より強くなろうと努力するものである。そしてそれは間接的にのみ自己を〈保存〉しようと欲する。（それは自己を凌駕しようと欲する）」(KSA, Bd.12, 9[98]＝WM488)[6]

「主体という〈アトム〉はない」。この文は特に解説をつけくわえる必要はないであろう。ニーチェの基本的世界観、生成の形而上学においては、厳密な意味での自己同一的対象は存在しえない。伝統的な形而上学が措定してきたような厳密な意味でのアトム的主体は、ニーチェの哲学においては存在しないのである。

「主体領域は絶えず増大しつつあるか、減少しつつあるかである」。ここでニーチェによる新しい主体の捉え方が登場する。即ち、ニーチェがポジティヴな意味で語る主体は領域として考えられるということである。個々の権力意志は、他の権力意志との関係において、実体というよりも、「絶えず増大しつつ」ある、ないし絶えず「減少しつつある」というような領域的なありかたをするものとして考えられている。よって、主体は、領域的自己同一性は有するものの厳密な意味での自己同一性を欠くので、「主体という系の中心は絶えず」、他の権力意志との関係において浮動するので、「変動しつつある」わけである。

「獲得した量を有機化できない場合、主体は二つに分裂する」[7]。自己の主体領域にとりこめなかった他の権力意志は自己の主体領域からは切り離される。しかし、「他方において」、自己の主体領域にとりこめる場合は、「主体は自分より弱い主体を無化することなしに、自分の機能に改造し、ついにある程度までそれと合体して、一つの新し

い統一を形成」し、主体領域の増大をはたすことになる。

「主体は〈実体〉ではなく、寧ろそれ自体、より強くなろうと努力するものである。そしてそれは間接的にのみ自己を〈保存〉しようと欲する。（それは自己を凌駕しようと欲する）」。主体はより強くなろうと努力するものとして規定されている。これはニーチェの権力意志の規定そのものである。但し、ここで言われる主体はもとより、ニーチェがポジティヴに語る主体は総じて主体領域として考えるのが妥当である。なぜなら、主体が領域として一定の限定をもつものとして考えられるからこそ、以前に比べてより強くなったとか、より弱くなったとか言いうるのであって、無定形の主体では「より～」という仕方で当の主体の状況を比較級の形式で捉えることすらできない。「より強くなろうと努力する」権力意志のありかたを理解する為にも、我々はニーチェのいう主体を主体領域として捉え返さなければならない。それ故、この文は寧ろ「主体領域は〈実体〉ではなく寧ろそれ自体、より強くなろうと努力するものである。そして、その主体領域は間接的にのみ自己を保存しようと欲する。（それは自己を凌駕しようと欲する）」と記述する方が事態のより正確な表現となろう。

以上のように、ニーチェにおいて、主体とは主体領域と称すべきものであり、それは厳密な自己同一性はないものの、まさに領域としての一定の自己同一性は有するものとして構想されていると考えられる。

この箇所で言及されている主体領域の議論は、特に、現象として成立しているところの一人一人の人間の個体に一対一対応するような権力意志のことを考える場合に重要である。主体領域として一定の自己同一性が語りうるがゆえに、現象として成立しているところの個人とそれに対応する形而上学的原理たる権力意志についても、「一つの」主体領域しての同一性を語りえ、従って、現象としての一人の個人に一つの主体領域が存在していると見なしうるからである。現象としての一個人に対応している形而上学的原理に関して、ニーチェにあっても尚、主体を語り得る。但し、それは主体領域としての主体であり、伝統的な形而上学でいわれてきたような実体としての主体ではない。現象としての個人に一対一対応するような主体領域のことを、以下、「個人の主体領域」と呼ぼう。伝統的な形而上学でいわれてきたような実体の性格として、「常・一・不変」という性格が挙げられようが、ニーチェのいう主体に関してはこの規定をそのままあてはめて考えることは無論できない。「個人の主体領域」に関しては、現象としての個人、意識としての個人にいつも随伴しているという点においては、「常」を語りえ、現象と

しての個人と一対一対応するようなものといえるという点においては、「一」を語りえるが、他の主体との関係においてたえず変動しているという意味においては「不変」は語りえない。つまり、ニーチェにおいて、「個人の主体領域」の性格は「常・一・不変」ではなく「常・一・可変」という性格を持っているのである。

Ⅲ

この章においては、前章で展開されたような主体領域の議論を、Ⅰ章で示された倫理の問題と連結する作業を試みてみよう。

ニーチェによれば、「人間が欲するもの、生命ある有機体のあらゆる最小部分も欲するもの、それは権力の増大である」(KSA, Bd.13, 14[174]＝WM 702)。従って、我々は、現に権力の増大をなそうという志向によって動いているわけである。これは、上の議論でいうと、主体領域の拡大を求めて動いているというふうにいいかえられる。ニーチェはここで、権力の増大を倫理的言説として語ろうとしている。人間が欲するものを直ぐさま倫理と称するのはムーアのいうところの自然主義的誤謬をおかしているのではないかという疑問は問題にならない。というのは、ニーチェにおいては倫理は「汝なすべし」でなく「我は欲す」でなければならないという洞察があるからである[8]。

しかし、ここのニーチェからの引用に見られる倫理説においては二つの問題があるように思われる。一つは、現に我々が、形而上学的原理の側において、権力の増大を求めているということが、単に事実問題を語るのみであるとするならば、これはそのままでは我々の生にある方針を与えるところの倫理的言説とならず、我々の生を指導するものとはなりえないということである。つまり、事実我々がそうである（権力の増大を求めている）ということが、我々のありかたの如何によらず、いつもそのようであるものならば、殊更に倫理的言説として述べる意味がなくなってしまう。この点をどう考えるべきか。更にもう一つ問題がある。人間は権力の増大を欲しているということが事実であるとしても、それは形而上学的原理の側、即ち我々の無意識の側の事態であり、それが意識の側で感知できる仕方に変換がなされなければ、やはり倫理的言説になりえないということである。形而上学的原理の側で起こっていることと、我々に意識可能な生のありかたとの連結がなされなければならない。この二つの問題をいかに考えるべきであろうか。

第二の問題の方から、処理してゆこう。

「生は一つの特殊の場合・・・（中略）・・・として、権力の極大感情を求めて努力する。それは本質的には権力の増大を求める努力であり、努力とは権力を求める努力以外の何ものでもなく、最深最奥のものはあくまでもこの意志である」(KSA, Bd.13, 14[82]＝WM 689)

この引用文からわかるのは、ニーチェは、権力の増大という仕方で記述される形而上学的原理の側の事態（つまりは主体領域の拡大）を、権力感情の増大という意識の側の事態と対応するものとして考えているということである。逆にいえば、権力の感情の増大ということを達成するならば、それは、権力の増大を達成することになるのである。権力感情の増大ということは、意識可能な事実である。よって、権力の増大を現になしえているのかどうかは、権力感情の増大がなされているかを見ればよい。権力の増大ということと権力感情の増大が互換概念となることによって、権力の増大という形而上学的原理のありかたが、我々に意識可能な生のありかたと連結されることになり、かくして第二の問題は解消された。

次いで、第一の問題の考察に移る。ニーチェは形而上学的原理としての我々のありかた、つまり、我々が権力の増大を求めているという事実を、権力の増大こそが価値であり、それに尽きるというかたちで、倫理的言説として捉えかえすのである。すなわち、権力の増大の達成のみが真に価値あるものとして規定されるのである。

「生においては、権力の程度以外に価値となるものは一切ないのだ。」(KSA, Bd.12, 5[71]＝WM55)
「幸福とは何か？――権力がしだいに大きくなる感情――抵抗を克服してゆく感情。」(AC 2)

事実として我々が権力の増大を求めているということを、単に事実として認識し、静観するのではなく、その権力の増大の達成（＝主体領域の拡大）こそが価値と言われるものであるというかたちで事態を捉えかえすことによってそれは倫理的言説となる。そして、その権力の増大を現に達成しえているかどうかは、権力感情の増大を自分自身が達成しえているかどうかにおきかえられる。

このような形式で倫理の問題をとらえ直すにあたっては、ニーチェにとっての事実・世界は「永遠反復」するという確信、並びに、そういう世界にあって尚、意味ある生は可能かという問題意識が、大きく影響しているといいうるであろう。ニーチェにとって、外界のありかたによって決定されてゆく事象は大きな意味をもたない。ニーチェは外界のありかたがどうあれ、それによって制約されない意味を求めた。いや寧ろ、より適切に表現するならば、意味というものを、総じて主体が定立するものとして捉えかえし、我々に内在し感知可能な権力感情の増大というものに一元化して規定し直したといってよい。つまり、主体の定立する意味とは、権力感情の増大であり、ただ単にそれに尽きるのである。それゆえ、次のように言われる。

「人間は快をもとめるのではなく、また不快を避けるのではない。私がこう主張することで、反論しているのが、いかなる著名な先入見であるかは、理解されるであろう。快と不快とは、単なる結果、単なる随伴現象である、――人間が欲するもの、生きている有機体のあらゆる最小部分も欲するもの、それは権力の増大である」(KSA, Bd.13, 14[174]＝WM 702)

外界の事物によって規定されがちな、快・不快のごとき感情を重視するのではなく、寧ろ、権力の増大、即ち権力感情の増大に意味の焦点を限定して考えてゆくという志向がここに表れている。このようにいわば「意味の意味」を規定しなすことによって、永遠反復(ewige Wiederkehr)する世界の中にあって尚、意味ある生の成立する余地を残すことができるのみならず、悦びをもってそれを迎える「永劫回帰(ewige Wiederkunft)の信仰」(KSA, Bd.12, 5[71]＝WM55)に至ることすら可能となるのである。

註

※ニーチェからの引用は、Friedrich Nietzsche, *Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe,* Hrsg. von Giorgio Colli und Mazzino Montinari, Deutscher Taschenbuch Verlag, München/Walter de Gruyter, Berlin/New York, 1980.（KSA と略記）、及び、Friedrich Nietzsche, *Sämtliche Werke in Zwölf Bänden,* Alfred Kröner Verlag,Stuttgart, 1964. による。
以下の略号のあとの数字はアフォリズム番号である。
AC = *Der Antichrist*

WM = *Der Wille zur Macht*

Z = *Also sprach Zarathustra*

遺稿断片については、基本的には、KSAの巻数、ノート番号、断片番号によって示すが、Kröner版の*Der Wille zur Macht*の断片番号も併記するよう努めた。

※実線のアンダーラインは全て筆者による強調である。尚、引用文中の強調等については種々の括弧等を用い、あまりに煩雑にならぬ限りにおいて、著者による強調を表記しようとした。

（1）永劫回帰体験直後と思われる断片は「１８８１年８月初め、シルスマリアにて。海抜６千フィート、一切の人間的事物を越えること遥かに高く。」という有名な一句を含んだもの。KSA, Bd. 9, 11[141]。

（2）前註と同一箇所、KSA, Bd. 9, 11[141]には、「すべてを生成として理解すること」との文章が見られる。又、生成とは、「〈定式化されがたいもの〉としての、《偽》としての、《自己矛盾する》ものとしての生成の世界の性格。」(KSA, Bd.12, 9[89]＝WM517)と言われるように、自己同一性を欠き、持続的な存在者が無く、力動的なありかたをするものとして考えられている。生成については、Ⅱ章で説明が加えられる。

（3）この点に関してはヤスパースの論述を参照。

「最後にニーチェの形而上学の特徴は、この形而上学において、彼は決して〈他の〉世界ではなくて、もっぱら〈この〉世界を思惟しようとするということである。彼にとっては彼岸的世界というものは決して存在しない。根底にある世界と単に現象する世界（真の世界と仮象の世界）との古い区別を彼は廃棄しようとする。彼にとっては、単に世界存在そのものが、あらゆる世界存在の形態をもつ権力への意志としてのわれわれの世界が、存在するだけである。それ以外に何ものも存在しない。彼の形而上学は世界存在を〈純粋内在〉として捉えるのである。」（ヤスパース：『ニーチェ（下巻）』草薙正夫訳　理想社　１９６７年　Ｐ７２）

（4）但し更にこのような認識からニーチェが考えたのは、そういった端的に虚偽の思想がいかにして成立しえたのか、その成立の条件を、世界の形而上学的原理の側から、考察してゆくことであった。世界の形而上学的原理とは生成であり、その生成を成り立たしめている個々の力のそれぞれは、権力意志として存在している。我々自身も権力意志としてのあり方をしていて、それ以外に世界を成立させる原理などはないのだとすると、そういった虚偽の思想がこの世に存在し、それが一定の勢力をもっていることの背景は、人々を動かしている権力意志のはたらきのある種のありかたに還元できる筈である。現にこの世に成立している（しかし、ニーチェからすると虚偽の）思想の成立条件をニーチェは真の形而上学的原理たる権力意志の中に探り、その成果を我々は、『道徳の系譜』の三論文や主に遺稿に記されている従来の形而上学の批判の内に見ることができる。

これらの考察の（特に『道徳の系譜』の）ニーチェ自身にとっての意味は、この世に見られる

道徳現象を自身の形而上学的原理で解釈することが可能であることを示すことによって、道徳の背後に「神」や「彼岸」等の超越的対象が存在している必要のないことを自分に対して確認することにあったと言えるのではないだろうか。

（5）KSA, Bd.12, 5[71]参照。

尚、「永遠反復」(ewige Wiederkehr)・「永劫回帰」(ewige Wiederkunft)という用語の区分に関しては、Joan Stambaugh, *Nietzsche's Thought of Eternal Return*, Johns Hopkins University Press, Baltimore, 1972, chap.2参照。

（6）ニーチェが「主体領域（Spähre eines Subjekts)」の用語を用いているのは、全遺稿中この箇所しかないのであるが、類似の表現でここでいう主体領域の存在を示唆しているとみられる箇所は少なくない。例えば「力の中心」(Kraftzentrum)(KSA, Bd. 13, 14[184]＝WM 567 、KSA, Bd. 13, 14[186]＝WM 636)、「支配的中心」(herrschaftliches Zentrum)(KSA, Bd. 13, 11[73]＝WM 715)等々。

（7）ニーチェがポジティヴな意味で語る主体には、二種類あると考えられる。一つは後に使用する言葉を先回りして使うと「個人の主体領域」と呼ぶべき主体であり、もう一つは、「欲動(Affekt)」・「衝動(Trieb)」・「欲求（Bedürfnis)」・「欲望(Begierde)」等と呼ばれるような主体である。後者のごときものを単に人間に現象するものとして捉えるのではなくそれ自身が自律的な主体としてのありかたをしていると捉えるのがニーチェの主体説の特徴である。ここで見られるような主体領域の議論において、前者の主体(「個人の主体領域」)が直接的に相互作用するのは後者の主体である。なぜなら、引用文中にあるように主体は二つに分裂するというような語句が見られるが、文字通り「個人の主体領域」が分裂するというのは表象しがたいからである。「個人の主体領域」の分裂とは、文字通りの分裂ではなく、主体領域が獲得した量を同化できない時、その量を後者の主体に委譲する事態であると考えられる。

尚、「ニーチェにおける主体の概念」については折をみて、独立の論考としてまとめる予定である。

（8）vgl.「服従への〈衝動〉が存在しないところでは、《汝なすべし》は無意味である。我々が現実にそうであるのと同じように――《汝なすべし》に対して我々は反抗的となる。我々の道徳は、《我欲す》でなければならない。」(KSA, Bd.10, 7[1])

〔堺女子短期大学非常勤講師〕

Nietztsches ontologische Wahrheit und Ethik

Hiroshi MATSUMOTO

In diesem Aufsatz versuche ich, den Zusammenhang von Nietzsches ontologischer Wahrheit und seiner Ethik zu klären. Nietzsches Begriff ontologischer Wahrheit lässt sich zu den folgen den zwei überzeugungen zusammenfassen: 1. Die Welt besteht in ewiger Wiederkehr des Gleichen; 2. Das Wesen des Seienden ist "der Wille zur Macht". Beide Überzeugungen entstanden aus Nietzcsches Erlebnis ewiger Wiederkunft. Die ewige Wiederkehr des Gleichen heisst, dass wir unser Leben in dieser Welt wieder und wieder leben müssen, und zwar weil die äusseren Vorgänge jedes Lebens unveränderlich bleiben. Diese Einsicht scheint unweigerlich zum Nihilismus zu führen. Eben diesen Nihilismus zu überwinden und dem Leben einen Wert zu geben, hatte Nietzsche sich zur ethischen Aufgabe gemacht.

Wie sucht Nietzsche nun, diese Aufgabe zu erfüllen? Um das zu verstehen, ist es notwendig Nietzsches Begriff des Subjekts zu untersuchen. Nietzsches Begriff des Subjekts lässt sich folgenderweise zusammenfassen:

1. Ein von Nietzsche positiv besetztes ontologisches Subjekt als "Wille zur Macht" schafft ein zweites, bewusstes Subjekt.
2. Ein Wille zur Macht entsteht erst im Zusammenhang mit einem anderen Willen zur Macht.
3. Jeder Wille zur Macht verlangt danach, stärker zu werden.
4. Indem er mit anderen willen zur Macht aufeinandertrifft, mehrt oder verliert er seine Macht.
5. Bedingt durch diese ständige Machtzu-bzw.-abnahme, ist das ontologische Subjekt tatsächlich veränderlich.
6. Um von Ab-oder Zunahme von Macht sprechen zu können, ist es nötig, eine "Sphäre" für den willen zur Macht anzunehmen.
7. Die Vergrösserung der Sphäre des Subjekts bedeutet ein "Mehr von Macht".

Nietzches Ethik als Lösung des Problems des Nihilismus gründet in diesem Begriff des Subjekts, weil sich Wert in einer Welt der ewigen Wiederkehr anhand äusseren Vorgänge nicht bestimmen liesse.